

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月24日現在

機関番号：10101
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2011
 課題番号：19720040
 研究課題名（和文）連歌百韻・千句古注釈の総合的研究

研究課題名（英文）Study of pre-moderan commentaries on Renga-Hyakuin, Senku

研究代表者

長谷川 千尋 (HASEGAWA CHIHIRO)
 北海道大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：90431296

研究成果の概要（和文）：連歌作品を研究する上で、作品に付された古注釈（江戸時代以前に執筆されたもの）は、すこぶる有益で欠くべからざる資料であるが、すべての本文が学会に提供されているわけではない。そこで本研究では、連歌の百韻・千句の古注釈の伝存状況を網羅的に調査した。その結果、『伊勢千句』『牡丹花宗碩両吟百韻』『宗牧独吟何人百韻』に関わる新出の古注を発見したのを始め、既存の古注にも新たな伝本を補い、未翻刻の古注を全翻刻し、基礎的研究を行った。

研究成果の概要（英文）：Although pre-moderan commentaries are very important for studies Renga, they are not supplied to us. On this investigation of pre-moderan commentaries on Renga-Hyakuin, Senku, there are many commentaries that are unknown on "Ise-Senku", "Hyakuin by "Nanihito Hyakuin by Soboku".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	0	0	0
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	450,000	2,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：連歌・百韻・千句・古注釈

1. 研究開始当初の背景

連歌は、付合文芸というその独自の性質により、各句の趣意を解説する注釈が、作者自身や、主に同時代の作品の享受者によって執筆された。ここでは、そのような注釈書のうち、江戸時代以前に執筆されたものを古注釈と称して研究対象とする。

連歌の古注釈に関する先行研究としては、金子金治郎氏による『連歌古注釈の研究』（角川書店1974）『連歌古注

釈集』（同1979）が主要なものとして挙げられる。これらは現存する連歌古注釈の全体像の把握を試みたものであるが、そこには以下のような課題も残されている。

(1) 金子氏の研究段階で既に存在が確認されていた古注のすべてが翻刻されたわけではなく、未翻刻のものが多数残る。特に同じ作品に複数種の古注が存する場合は一種類しか翻刻されていない場合が多い。

(2)その後、資料の公開と目録化が進んだこと、また、『連歌総目録』(明治書院1997)が刊行されたことを承けて、古注釈資料を再度、悉皆調査する必要が生じた。

(3)金子氏による古注釈の個別の解題には、なお補足・検証の余地がある。

研究代表者は、如上の問題意識により、これまでも『伊勢千句』『称名院追善千句』『聖廟法楽千句』の、未翻刻ないし未紹介の古注の刊行に携わってきた(『京都大学蔵貴重連歌資料集』臨川書店2002、2003、兼載独吟「聖廟千句」和泉書院2007)が、さらに総合的な研究を推進すべく、本研究を企図した。

2. 研究の目的

室町時代に制作された連歌の百韻・千句を対象とし、それらに付随する古注釈の伝存状況を網羅的に調査する。なお、連歌の古注釈は、形態上、句集の注と百韻・千句の注とに分けられるが、本研究は専ら後者を対象とする。これは、二句で完結する付合の研究のみならず、去嫌、行様を意識した百韻全体の作品研究が進展する必要があり、百韻・千句の古注の方がより優先順位が高いと判断したためである。

次に、調査の結果、未翻刻・未紹介の古注が確認されれば、資料を収集し、学会に提供することを企図して翻刻を行う。また、各作品の古注釈の生成過程を明らかにし、金子氏の示された連歌古注釈史の補填・検証を実施する。かつ、古注釈がもたらす情報は、最大限に利用して連歌の作品研究に結実させる。特にこれまで数種類以上の古注が備わる作品については、古注の翻刻や影印の提供が一部にとどまったため、古注釈相互の比較対照が十分にされてこなかったきらいがある。古注釈間で解釈が対立することは頻繁に見られる現象であるが、そのような句に注目し各説を比較検討してこそ、それぞれの古注の特質も浮き彫りとなるはずであり、また句の作者の意図に接近することもできるはずである。

3. 研究の方法

室町時代に詠作された連歌の古注釈の伝存状況を調査し、新出の古注や新出の伝本の有無を確認する。方法としては、まず『連歌総目録』に百韻・千句の伝本ごとに古注の有無が記載されているのを便りに、金子氏の著書等に

言及されていない伝本を割り出す。すると対象作品は以下の15点となる。

1『三島千句』(大阪市立大学) 2『美濃千句』(天理図書館) 3『文明八年一月十一日宗祇独吟百韻』(東京大学) 4『水無瀬三吟百韻』(広島大学) 5『宗祇独吟住吉法楽百韻』(東京大学) 6『湯山三吟百韻』(佐渡大願寺、広島大学) 7『宗祇独吟小松原百韻』(東京大学) 8『年次未詳宗祇独吟百韻』(「天の戸を」(東京大学) 9『牡丹花宗碩両吟百韻』(柿衛文庫、東京大学、佐渡大願寺、山岸文庫) 10『伊勢千句』(名古屋市鶴舞図書館、神宮徴古館、ほかに甲子庵文庫等) 11『宗牧月並千二百韻』(陽明文庫) 12『雪牧両吟住吉法楽百韻』(広島大学、京都大学、佐渡大願寺、屏山文庫) 13『宗牧独吟竹生島百韻』(広島大学) 14『宗牧独吟何人百韻』(大東急記念文庫、天理図書館、京都大学) 15『年次未詳宗牧独吟賀茂社法楽百韻』(「波の音」(宮内庁書陵部)

ただし、『連歌総目録』の注記に不備等がある可能性を考慮して、古注を伴う以下の代表的な作品については諸本の悉皆調査を行い、有注本の遺漏がないかどうか、そのなかに新出の注が含まれていないかどうかを確認する。

①『明応八年七月宗祇独吟何人百韻』 ②『夢庵独吟何路百韻』 ③『矢島小林庵百韻』 ④『梅牧両吟百韻』 ⑤『宗長追善宗牧独吟百韻』 ⑥『十花千句』 ⑦『宗臨独吟千句』

この他にも新規に公開された文庫・図書館等の所蔵先や古書店等の情報に注意する。

上記の方法により、新出本と認定される伝本があれば、詳しい調査を進める。また、未刊ないし新出の古注については翻刻を行う。

これと平行して『聖廟法楽千句』の四種の古注(天理図書館、広島大学、山口県文書館、国会図書館)を刊行するための準備を進める。このうち三種は既に雑誌や単行本に翻刻があるが、それぞれが別々に翻刻されているという状況は使い勝手が良いとは言えず、一句ごとに四種の古注を対照させて翻刻するという体裁が望ましいと感ずる。そこで、今回の調査によって発見されるであろう古注も含め、各注対照型の古注釈集成として刊行することを念頭に、翻刻を行う。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」に記した15点、追加7点の百韻・千句の伝本調査の成果について、ここでは特に従来知られていなかった新出の古注に関わるものを中心に記述することにする。その他に、既に知られている古注の範囲で、新たに加え得た伝本も多数あるが、煩雑となるため、詳細については省略する（但し、『伊勢千句』の新伝本については下記(2)に記した）。また、高野山正智院に蔵される60点余りの連歌資料を悉皆調査する機会を得たが、古注釈に関わる新出資料は発見できなかったため、これも詳細については省略する。

(1) 「3. 研究の方法」に記した9『牡丹花宗碩両吟百韻』の調査対象伝本のうち、佐渡大願寺蔵本は既存の二種の注に加わる新出の注と判明し、第三種注とした。本百韻には、作者牡丹花（肖柏）の自注（第一種注）が備わるが、自注は施注句が僅か二十九句のみで、うち十九句が牡丹花自身の句という偏りがある、百韻の解説を助ける資料としては不十分であった。そのため、全句を対象とした詳注である第二種注及び第三種注の存在意義は大きい。特に新出の第三種注は、これまで知られていなかった、本百韻の興行目的や当座の出句事情に言及するところがある、貴重である。例えば「撰津池田」氏が、牡丹花の草庵、夢庵を「新造」という第三種注の指摘は信頼できる記述であり、永正九年（1512）ないし十年の夢庵新造の後援者としては池田正棟が考えられる。新造を祝するに相応しい明るい発句で始まった本百韻の中には、性繁、道泉という旧友を失った、牡丹花の孤独な心境を投影した句も見出されることなども指摘し、古注を利用した作品研究を行った。

(2) 「3. 研究の方法」に記した10『伊勢千句』の古注釈伝本は、金子氏が精注群に分類したものが七種ある。その後、研究代表者は、『京都大学蔵貴重連歌資料集』の『伊勢千句』解題において、さらに五種の新出注が存すること、既存の第一種注に伝本四本を補い得ること等を指摘し、未翻刻注2点、新出注2点を翻刻紹介している。

そして今回の調査により、既存の第六種注に新たに天理図書館蔵一本、第七種注に大阪天満宮文庫蔵一本が加わることが判明した。また、未分類の五種の注のうちである甲子庵文庫蔵本と

同一の注として、名古屋大学皇學館文庫蔵本を確認した。一方、東京大学酒竹文庫蔵本は、精注群と粗注群の中間的なものだが、新出の注である。粗注群に関しては、金子氏の提示した物の他に、天理図書館蔵一本が加わった。

以上のように、今回の調査で判明した新出注は一点のみであるが、これまでに発見された未翻刻の注は実に多く伝本総数も多数に上る。すなわち、金子氏の分類による第二種注、第三種注、第四種注、第六種注、そして未分類の名古屋市鶴舞図書館蔵本、甲子庵文庫蔵本、神宮徴古館蔵本の計七種類が未翻刻の注である（粗注群を除く）。これらの資料を収集し、順次翻刻を行ったが、句読点・濁点等を付しての翻刻であるため、作品の読解作業と平行させる必要があり、翻刻の確認作業は現在も進行中である。従って、新出注を加えた『伊勢千句』古注群の再分類、及び各注の詳細な考察には至っていない。しかし、現段階において、各注釈書の成立過程を解き明かす鍵となるであろう重要な記述をいくつか見いだしており、さらに各句の解釈の相違に踏み込んで検討することによって、宗長由来の系統のもの、宗碩由来の系統のものとそれ以外に大別できるのではなかろうかという見通しを持っている。

(3) 「3. 研究の方法」に記した14『宗牧独吟何人百韻』については、『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 連歌Ⅱ』（汲古書院2009）において、大東急記念文庫所蔵の加注本の影印刊行、解題執筆に携わった。本百韻の古注釈は、既に翻刻が刊行されている第一種注と、今回影印が刊行された第二種注（大東急本、天理本）が知られている。これに加えて、金子氏が「繁簡はあるが第二種になろう」と指摘した京大本があるが、京大本の内容を検すると、やはり第二種とは別種とすべき注で、第三種注と位置づけられることがわかった。

(4) 以上を総括すると、新出の古注はやはり宗祇より後の時代に限られ、数も限られてはいたが、やはり確認することができた。各注対照型の連歌百韻・千句の古注釈集成の柱は、なんといっても『伊勢千句』注十二種であり、これに『聖廟法楽千句』注四種がもう一方の柱となって、新出注を含む『牡丹花宗碩両吟百韻』『宗牧独吟何人百韻』の注に、他の未翻刻の百韻注が加わる構成となるであろう。既に翻刻作業は

あらかた終えたものの、『伊勢千句』古注の系統分類が今後の課題として残されているが、出来る限り早期の刊行を目指したい。また、百韻・千句の古注とは別個に扱い、今回対象外とした句集の注についても、今後、資料収集と翻刻提供を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①長谷川千尋、幽玄がらする詩学、文学、査読無、隔月刊12巻4号、2011、p58-69

②長谷川千尋、細川幽齋連歌序説、『細川幽齋 戦塵の中の学芸』(笠間書院)、2010、p131-150

③長谷川千尋、東常縁の歌学における常光院流の継承、『中世近世和歌文芸論集』(思文閣出版)、2008、p50-79

④長谷川千尋、夢庵新造と牡丹花宗碩両吟、北海道大学大学院文学研究科紀要、査読無、125号、2008、p41-64

[図書] (計2件)

①大阪俳文学研究会、和泉書院、『兼載独吟「聖廟千句」—第一百韻をよむ—』、2007、p5-p32、解題p193-219執筆

②汲古書院、『大東急記念文庫叢刊 中古中世篇 連歌Ⅱ』2009、解題p6-21執筆

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 千尋 (HASEGAWA CHIHIRO)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90431296

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし